

八木健に学ぶ滑稽俳句 11

高橋 素子

結氷に堕ちたる蝶の高あがる 八木健

モーグルといへど潜らぬスキー板 八木健

ソチ冬季オリンピックが国民全てを感動の渦に巻き込んで終わった。特にフィギュアスケート女子フリーでの浅田真央選手の演技の一挙一動に手に汗握り、ジャンプが成功する度に涙が溢れた。金メダルを期待されていた彼女が、前日のS Pではまさかの十六位という想像も出来ない結果である。「自分でもどうしたのか分かりません」と、気の抜けた様な表情。明日のフリーは、どうするのだろうと思うだけで、私の胸も痛んだ。だが、S Pの悔しい結果をバネに底力をみせ、フリーでは最高の演技で、集大成と位置付けた五輪を涙と共に締めくくった。この出来事は簡単に金を獲得するよりも、国民に大きな感動をもたらしてくれたと、私は思っている。「日々の努力はどん底からの再起をも可能にする」ことを教えられ、私はまた感動の涙にくれた。

師匠・八木健は、フリーのこの演技の様子を見事に、掲出の句の如く十七音字に詠んでいる。

師を見倣って、私も一句詠んでみる。

凍蝶のジャンプ六種に息をのむ 素子

今回も古今の名句と師匠・八木健の句の比較により、滑稽句の学習を深めていきたい。

外にも出よ触るるばかりに春の月	中村汀女
春の月歩幅にゆれてをりにけり	八木健

掲出の汀女の句は、天性の美しく豊かな資質が、余すところなく発揮された汀女の代表作のひとつである。「外にも出よ」の命令表現が、大きな滴る色の春の月を目にした時の驚きと感動をよく伝えている。

師・八木健は「春の夜のゆったりした愉快的気分のなか、月は歩幅にゆれてどこまでもついてくる。事実をありのままに詠むとこんな句になるのです」と、語る。「歩幅にゆれる」と、師・独自の手垢のついてない表現で、滑稽句の佳句となっている。

入学の少年母を掴む癖	右城暮石
入学の子にランドセルとりつける	八木健

右城暮石の句は、入学で母親から離れて、独り立ちしなければならない少年の漠然とした不安を、「母を掴む」という動作で、見える形に詠んだ名句である。

師・八木健の句は、少子化の現代において、初めてランドセルを背負わせることには、親も子も緊張気味。それは、まるでランドセルを子の背に

とりつけている様な可笑しい風景に見え、その裏に「哀感」さえほの見えるて来ると、師は語る。

目隠しの闇に母ゐる福笑ひ	丹沢亜郎
福笑ひ整形外科もお手あげの	八木健

掲出の丹波亜郎の句は、福笑いの目隠しの闇の中に不意に亡き母の面影をみる。笑いを期待している見物人達を尻目に、真剣に母の顔を作りあげようとしている作者の姿がみえて哀しい。

師・八木健の句は、福笑いのお多福の顔は、戯れ事ながら、整形外科医すらどうする事も出来ないほど珍妙であると詠み、滑稽な佳句となっている。

風邪引きの鼻のつまりし美人かな	高浜虚子
水っ洩美人のママを懲らしめる	八木健

いずれも、美人の定義を裏切る可笑しさを句に詠んでいる。いつもは取り澄ましている美人が風邪で鼻をつまらせている様子は、ちょっぴり可笑しくも哀れである。虚子はそんな美人を正直に写生して、滑稽句に詠んでいる。

行きつけのスナックの美人のママの水洩が止まらない。いつも振り向いてくれないママを、「神様が水っ洩で懲らしめている」と感じて素直に

詠んだら、誇張気味の面白い句になったと、師匠は語る。

師・八木健の作句法のひとつに、「句の構成に意外性が欲しい」とある。
この句はその好例である。

蟻の道雲の峰よりつづきけん 小林一茶

一匹の蟻蟻の列はなれゆく 八木健

掲出の一茶の句は、蟻が隊列をなして、どこまでも連なるさまを「蟻の道」とか「蟻の列」というが、このえんえんと連なる蟻の隊列は、はるか雲の峰から続いているのだろうの句意である。「雲の峰」は、雷を伴い強い雨を降らせる積乱雲、所謂入道雲の事であるが、雲の峰より蟻の道をはるかに大きく強靱なものに描く大胆な構図である。この様に、大小・強弱という定まった価値を逆転させて描き俳諧味を出すことで、見事な名句となっている。

蟻は、女王蟻・雄蟻・働き蟻と見事なまでに差別化された管理社会の中で、文句も言わず、黙々と己の任務を忠実にこなしている。そんな社会生活の中で、蟻にもそれぞれの悲しみがあって当然であろう。従来の遺伝形態を破って、突然変異的に一匹の蟻がその事に気付いたとすれば……。師・八木健は一匹の蟻の行動にそんなことを想像したのであろうか。蟻の社会を人間社会にだぶらせて、見事な佳句となっている。